

被災地域の消防団員の手記 (3) (宮城県 気仙沼市消防団)



東日本大震災： 大津波がすべてを変えた

宮城県気仙沼市消防団
分団長

村上 貴敏

2011年3月11日 観測至上最大、巨大地震、史上稀に見る破壊力で押し寄せた津波…大津波がすべてを変えました…

宮城県気仙沼市消防団第3分団長の村上です。

それではテーマ「東日本大震災による被害」「消防団の災害活動」「課題と今後の対策」この3点を中心に東日本大震災の活動報告を発表します。

はじめに、気仙沼市の概要です(図01)。

気仙沼市は、宮城県の北東端に位置しリアス式海岸特有の丘陵が海に迫り出した地形をしており、河口や谷間の平坦地を中心として市街地が形成されています。東は太平洋に面し、湾の入り口に離島大島を配した天然の良港で、全国有数の漁業基地として各地の漁船が入港し繁栄してきました。市の総面積は333.37km²で、宮城県内では7番目の広さです。

気仙沼市消防団の組織図です(図02)。

震災時の団員数は、団長以下860名になります。組織は、本部と第1分団から第14分団までの4と9の分団を除き、12の分団となっております。

私の第3分団は4部11班で80名の団員で構成されております。

本部の企画部は消防団の健全な発達と円滑な運営を期するため、副分団長の職にある者をもって組織しております。消防施設の拡充に関すること、消防計画の企画立案、消防団員の教育訓練に関することなどを調査研究しております。



図01

主な三陸を襲った過去の津波災害であります。

明治三陸地震津波では、気仙沼市での人的被害も多く、死者が1906人でした。また35年のチリ地震津波の時は、遠地津波であり、22時間30分後に到達しております。これらの災害を教訓に、気仙沼市では、毎年、地区住民と防災関係機関が連携して避難訓練を実施してきました。

三陸の特徴はリアス式海岸における狭い地形、狭い市街地、湾から一体となった地形、港として古くからの活用、そして、沿岸漁業や養殖などの漁業が盛んで、沿岸に漁業者の生活圏がありました。

これらの特徴は、津波被害の規模の大きさの要因でもありました。まだ暫定の部分もありますが、東日本大震災の概要です。

地震の規模は、当初マグニチュード8.8だった

2 気仙沼市消防団組織図

【階級別消防団員数】(H23.3.11震災時)

団長	副団長	分団長	副分団長	部長	班長	団員	合計
1	5	13	26	43	114	658	860

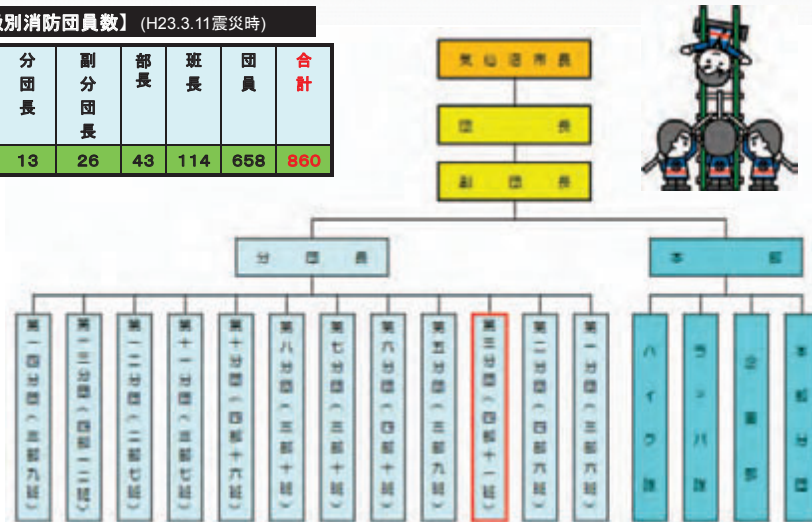


図02

のが、その後、モーメントマグニチュード9.0に修正され、国内観測史上最大規模でありました。

14時49分に「大津波警報」が発表され、当地域での観測は、気仙沼市消防署大島出張所隊による、高台海面監視で15時11分に押し波による第1波を観測しました。

気仙沼市の被害状況についての報道記事です(図03)。

気仙沼市では、屋外タンクの流出による内湾大火災や浸水災害の巨大さに住民がぼう然となりました。

各機関の動きです。

3月11日、14時46分に、宮城県三陸沖を震源とする巨大地震が発生。

気仙沼市では、直ちに災害対策本部を設置し、非常配備を指示しております。

消防団は、事前命令により消防屯所に参集しました。14時49分、気象庁から「東日本沿岸に大津波警報」が発表され、消防団は、水門門扉の閉鎖と避難広報活動を実施しております。

気仙沼市の被害状況です。

暫定的な数値ですが、6月30日現在、人的被害

6 津波の対応・被害状況 (気仙沼市)



図03

は死者983人、行方不明者446人になります。住家被害は、全壊8,492棟、半壊は、2,259棟であります。

避難所は、52ヶ所で、2,308人の避難者が避難所で生活しております。

気仙沼市消防団の被災状況です。

人的被害は、死者が8人で、うち公務中が6人でありました。

屯所などの施設は、95施設のうち、全壊が33棟で半壊が3棟であります。

消防車両等は、84台の車両のうちポンプ車が2

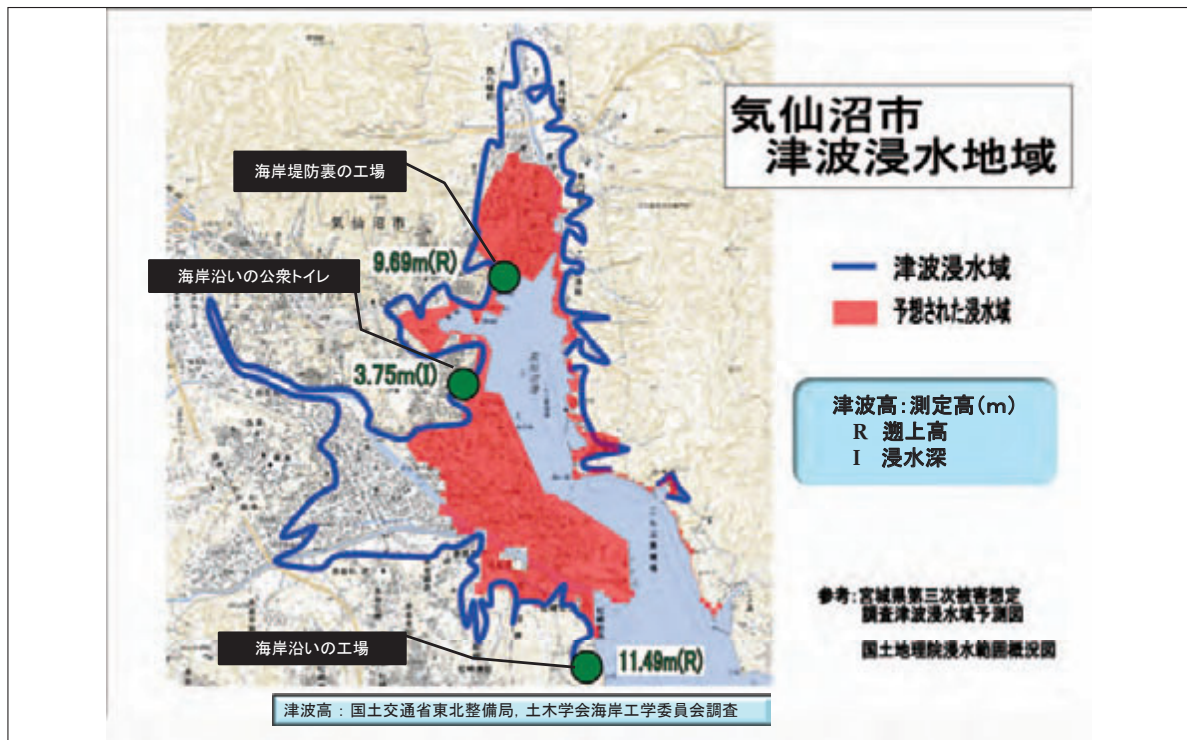


図04



図05

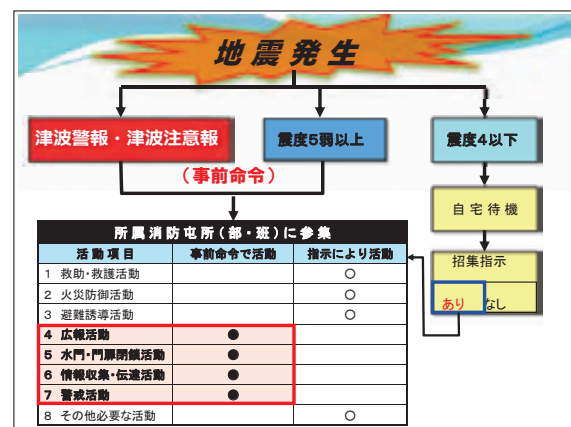


図06

台、積載車が10台で、小型ポンプは、86台のうち22台が津波により、流失水没しました。

津波浸水区域は、気仙沼市が浸水面積18km²で、浸水比率が5.4%であり、浸水範囲が市街地におよび壊滅状態となりました。

気仙沼市の津波浸水地域です（図04）。

赤で塗られた面積は、宮城県が第3次被害想定で想定していた津波の範囲であります。

今回の大津波は、その範囲をはるかに超えまして、青線で囲んだ範囲まで浸水しました。

津波高の種類は、遡上高と浸水深があります

が、気仙沼市前浜地区の海岸沿いの工場付近で、高さ11.49mの遡上高が測定されております。

大津波が街区を襲った後の状況です（図05）。

今回の津波災害の特色は、石油タンクが流失し、火災の要因のひとつとなったことと、400トン級の鮪延縄船などが津波により簡単に陸揚げされたことなど、津波の恐ろしさが分かりました。

気仙沼市消防団の地震津波災害時の活動フロー時における基本事項です（図06）。

平成16年7月1日に作成しました。



図07

主な基本事項です。

- 1 参集途上時、災害遭遇時は、必要な措置をとること
 - 2 安全管理に十分配慮し事故防止に万全を期すること
 - 3 津波到達予想時刻の10分前には避難完了すること
 - 4 団指揮本部への活動報告等は、積極的に行うこと
 - 5 活動団員不足時、安全に配慮した中で住民協力を求めること
- これらを基本とした活動フローになります。

実際の活動フローです。

震度5弱以上、津波注意報・警報発令で事前命令により、所属の消防屯所に参集します。

活動は、広報活動・水門門扉の閉鎖活動・情報収集伝達活動・警戒活動などです。

特に水門門扉閉鎖活動時においては、現場の状況や防災行政無線、団指揮本部からの情報等に注意し、団員の避難時期を見失なわないよう十分注意して活動しております。

気仙沼市消防団の主な災害活動です。

今回の震災活動では、火災防御・避難誘導・救助活動・集中搜索・遺体搬送公共施設の清掃活動を実施しました。

第3分団区域内での主な災害活動の図面です(図07)。

大きく2つの活動エリアになります。

1つは、鹿折地区中心部での火災防御、避難誘導、救助活動と遺体搬送活動です。

もう1つは、鹿折東沿岸部地区での広範囲に渡る、集中搜索活動です。

鹿折地区中心部で発生した街区火災の防ぎょ図です(図08)。

3月11日15時56分火災覚知、出火場所は、気仙沼市みなと町と中みなと町地内で赤斜線の区域内です。

初動時、広域消防隊と連携し、消防団はBライン中継隊形をとり、防御活動を実施しましたが、劣勢状況でした(図09)。

火災は広範囲であり、広域消防では、被災区域以外の消防団、各分団に応援要請を行いました。

応援要請で駆けつけた各分団は、水利が十分で

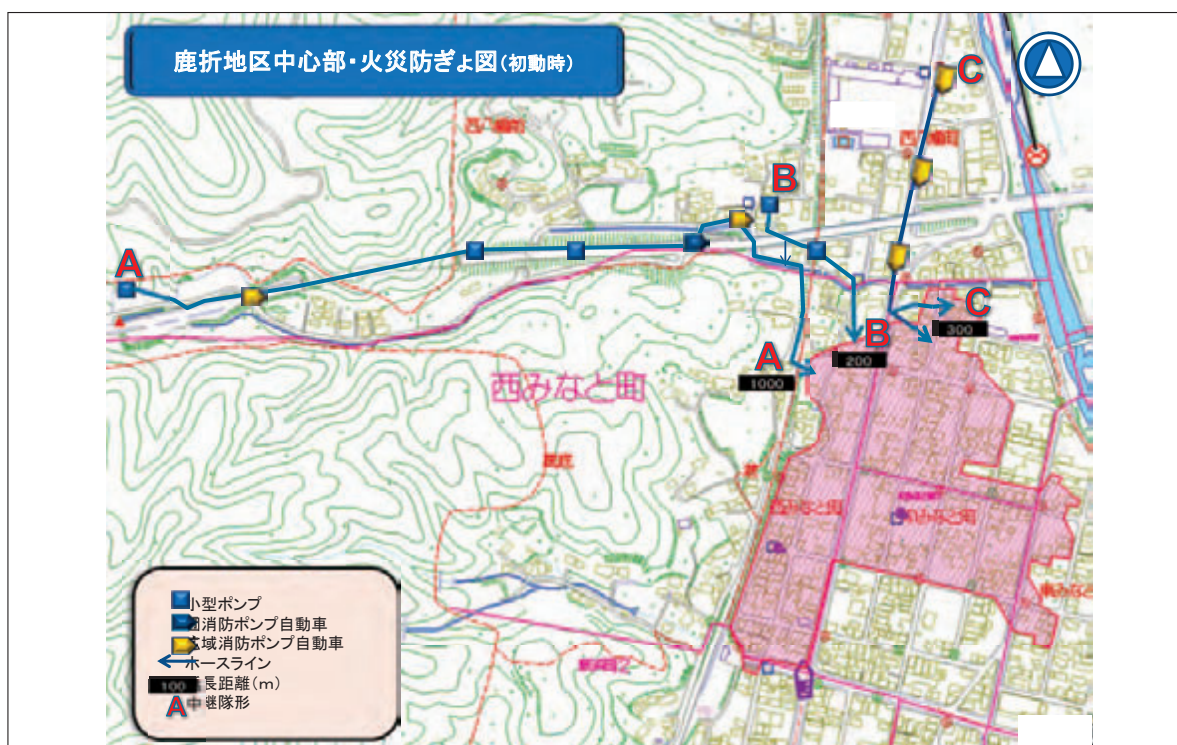


図08



図09



図10

なく、遠距離送水を余儀なくされ、図面のAラインは、ポンプ車や小型ポンプ6台での中継隊形をとり、約1,000mの遠距離送水を行いました。

現場は、街区全体に火災が拡大しており、南側からの進入は津波浸水で進入できず、火災防御活動は、すべて北側からの隊形となりました。

火災防ぎょ活動中、数回にわたっての津波襲来や津波警報による消火中断もあり延焼が拡大しました。

夜間も燃料補給などで車両の交代をしながら、一昼夜、防御活動を続けましたが、瓦礫に阻ま

れ、なかなか鎮圧することも出来ない状況でした。

翌日12日には、緊急消防援助隊の東京消防庁と合同での活動を実施し、消防団は、火災発生から3日間、不眠不休で活動しました。

出動車両は、ポンプ車11台、小型ポンプ6台、出動人員は、述べ271名でした。

鹿折街区火災は、3月11日15時56分に発生し、町中心部の瓦礫がくすぶり続け、鎮火したのが3月23日の朝、7時48分でした（図10）。

13日間燃え続けた火災でした。

こちらが、鹿折地区中心部の写真です（図11）。
写真下の気仙沼バイパス側が北側で、写真上が
南側となります。
南側、気仙沼湾方向から津波が襲来し、気仙沼

バイパス下まで冠水しました。

火災は、赤線で囲んだ範囲です。

焼損棟数は、295棟で、焼失面積は、約10万m²
でした。



図 11



図 12



図13

また火災対応と並行して、鹿折地区の搜索救助活動を実施しております。

特に、黄色の丸で囲んだ場所に位置する老健施設（老人保健施設）では、救助活動と遺体搬送を行いました。

その老健施設です（図12）。

2階建て耐火構造で延べ面積3,566.4m²

2階部分まで津波襲来し、1階部分の開口部や2階へのスロープは破壊されておりました。津波により孤立取り残された要救助者を浸水区域内から救出し、安全な地域へ避難誘導と搬送を3班20名で行いました。

外観は、スロープ壁体が破壊され、1階内部は壊滅状態でした。

屋上は避難者の毛布、布団敷物が点在している状態でした。取り残された職員や入居者50名を広域消防や東京消防庁のハイパーレスキュー隊と連携しながら救助し、安全な場所まで誘導しました。

一方では、残念ながら津波から逃げられなかった人々の無念な姿となった数体のご遺体を搬送しなければならませんでした（図13）。

ご遺体搬送が、消防団の災害活動にあたるかどうかは別にして多くのご遺体を目の前にして、我々が何とかしなければと思ったわけです。

職員の手で2階のベッドや、屋上に寝かされていたご遺体を手分けして毛布、シーツ等現場にあるものを利用し、簡易担架を作成して搬送しました。

悲惨な状況に、心が痛み、やりきれない活動で



図14



図15

ありました。

集中搜索活動は4月25日、26日2日間にわたり、自衛隊・警察・消防と合同で一斉搜索を行いました（図14）。

気仙沼市消防団は、広域消防・自衛隊と合同で、鹿折地区東沿岸部と唐桑地区を搜索しました。

朝9時から16時までの活動時間で、114名の消防団員を動員しての搜索活動でした。

こちらは、第13分団区域内での、公共施設清掃の活動状況です（図15）。

津波で被災した、4月10日に本吉病院内外の清掃を実施しました。水利がなく、津谷川から500mの距離を中継しながら46名の団員で、清掃活動を実施しました。

以上が主な災害活動でした。

消防団活動について、参集状況からまとめたものです。



図16

- 1 参集状況は、各部集合場所が決まっているのですぐ行動できました。
- 2 発災直後は、時間の許す限り、水門門扉閉鎖および広報活動を行っています。
- 3 人員確保については、活動終了時に、班長以上の会議で翌日の人員調整を行いました。
- 4 事前に決まっていたことは、沿岸部の区域は孤立してしまうので、各部長・班長は、自治会長と連絡を取り合って行動するように決めておりました。
- 5 資機材不足を感じたことはいろいろありますが、特に遺体搬送時の担架と電池式の無線機の必要を感じました。

問題点と課題についてです。主なものを挙げました。

- ・防災行政無線の津波による使用不能での情報不足
- ・瓦礫、浸水区域内における早期道路啓開がなければ、現場にたどり着けない状況
- ・大津波の場合の水門門扉閉鎖活動においては、その必要性和避難の判断時期
- ・被災している団員も長期災害活動を余儀なくされ、精神的・肉体的ストレスの対応の問題
- ・避難指示広報に対して一部住民が避難しようとせず、避難意識の低下がみられたこと

・団員が不足している中での長期活動における交代要員確保と時期

これらが問題点であり、今後の課題かなと考えます。

問題点と課題をとらえ、今後の対策をどうとったら良いのか？ 災害時において消防団員は、地域住民の生命を守るために活動しますが、人数的にも時間的にも限界があります。

情報の収集や、災害対応における体制の確立も必要ですが、やはり死者ゼロを目指すためには、住民の意識改革が絶対です。防災意識と知識の啓発に努め、自助共助の精神を確立しなければならないと考えます。地域住民と消防団員の命を守るためにも、各防災機関相互に連携して対策を講じなければならないと思います。

今回の震災で、仲間である消防団員や屯所、消防車両などが被災し、消防力の低下がみられました。

しかし、宮城県消防協会、日本消防協会を通じ、全国の消防団皆様からのご支援をいただきながら、現在は、消防車両も充実し、復興復旧に全力をあげ、取り組んでおります。

全国の皆様からの絆を感じ、そのパワーを糧に今後も消防団活動に邁進する覚悟です。

この場をお借りし、全国の消防団の皆様へ御礼を述べて、私の活動報告を終わります。

ありがとうございました。

被災地域の消防団員の手記（4）（宮城県 気仙沼市消防団）

消防団無線を通じて知った
我が町壊滅の知らせ宮城県気仙沼市消防団
第13分団 副分団長三浦 弘一（56歳）
消防団歴 26年（小売業）

気仙沼市本吉区を管轄する第13分団

気仙沼市消防団第13分団は本吉地区（旧本吉町）に属し、震災当時、94名の団員が所属していた。第13分団の第1部は自営業者が多く、第2部の第1班は漁業が多い。

3月11日、私は木造2階建ての衣料品の店舗兼自宅にいた。客4人を店舗裏の鉄骨造りの車庫に避難させ、店舗を閉めて活動服に着替え、車は使わずフル装備で、走って14時56分に気仙沼市役所本吉総合支所に着いた。

第13分団は、旧本吉町の平成16年3月にアナログの消防団無線を導入しており、地震災害時の初動計画では、各班事前命令に基づき、避難広報や水門閉鎖活動が割り当てられているが、無線統制をかけ指揮をとるために班長と副分団長の2名が本吉総合支所内の本部に来るとされていた。途中、道路が陥没している箇所があり、火災の心配をしたが、正直、津波が町裏まで到達することは頭になかった。14時56分に消防団無線を本吉総合支所で開局したが、応答はなかった。山奥の炭小屋で、炭窯が落ちて燃える火災があり、2隊出動して、すぐ鎮火できた。

たった7分間で壊滅した小泉町

15時40分頃、支所庁舎の2階で窓越しに「何だあれは？」と、見えたのが津波だった。家屋が傾き、動いている。波が黒というよりは土色の洪水時の河川の色だったが、音は聞こえなかった。自分を含めて消防団員4名、課長をはじめとする支所職員がいたが、慌てて何人かが屋上へ上がり、写真を撮った。津波が来るとは思っていたが、ここまで来ると考えなかった。引き波の報告はなかった。後から家族から聞いた話では、高い所でも“メリメリ”という家屋のつぶれる音がしたと言っていた。

15時10分、「水門を閉鎖した。」と無線連絡が入った後、次々に津波の連絡を受けた。

- 15：23 小泉川の逆流確認
- 15：24 蔵内漁港に津波到達、小泉大橋近くの堤防決壊
- 15：25 大谷町裏に津波の浸水があった。
- 15：26 小泉町浸水
- 15：28 小泉町家屋流失
- 15：31 小泉町家屋壊滅状態

15時23分以降の無線が残念で仕方ない。津波が川を遡上しているという連絡があってから、壊滅までたった7分間の出来事だ。被害状況を把握

したというより、家屋流出、壊滅といってもどれくらいの規模なのか正直なところ想像がつかなかった。翌日現地に入って見たら、小泉の町がなくなってしまった。町がなかった。映像に出ている志津川や陸前高田と全く同じで、家屋などがすべて山側に押しやられて跡形もなく、他の地区から比べるとガレキの量自体が少なかった。

無線は私と本部の班長が2人で聞いてメモし、支所の職員がさらにそれを補助して書き留め、時系列にして貼り出た。するとそれを確認した庁内の職員がザワついた。

本来ならば、無線を避難誘導、広報活動、安否確認等で活用しようと思っていたが、15時40分以降、実際に津波を目視し、私たちはすでに小泉地区は壊滅していると確信した。伝えてきたのは消防団無線だ。全車両にはついておらず、小泉地区には3台無線があり、第11分団で2名の消防団員が殉職した消防車からも報告を受けていた。

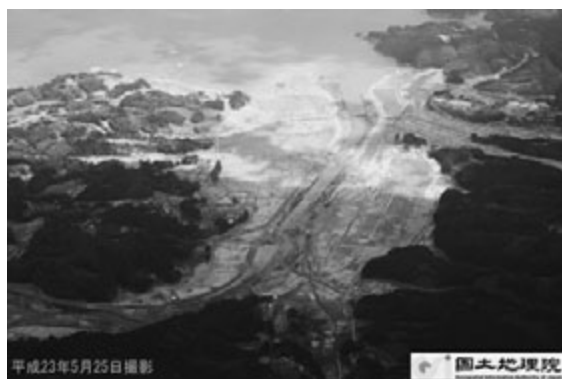
川で遡上を確認し、消防団が閉めることになっていた水門1ヶ所を、大橋を右折して閉めた後、避難広報をしていて消防車ごと流されたようだ。

小泉でポンプ車が広報活動しても、津波はここまでは来ないだろうと自宅に残った人もおり、町裏では7人死亡した。宮城県沖を想定した津波の想定浸水地域10mぐらいの所にある建物の上を呑みこむように津波が来て、水道局事務所に逃げた人たちや、職員2名、常備消防署員1名も亡くなった。想定外だった。

本部を離れ、救助活動へ

15時50分過ぎに本部の無線を佐藤班長に任せ、上司である副団長の許可を得て、無線を持って2名で状況確認に行った。16時02分に津谷小学校に行き、迎えに来ていた保護者の車の確認と児童数の確認を先生方をお願いして本部へ報告した。

次に町裏を通過して中学校に向かった。中学校の通学路になっている中道線の路上には、小泉海岸から流されてきたと思われる松の木が横たわって



気仙沼市本吉町の陸前小泉駅周辺(国土地理院)

いた。中学校の手前で、60歳～70歳ぐらいの2人の婦人を、中学生3年生の男子2人が救助して中道線の近くまで来ていると聞き、私たちが行って泥の中を助けた。最初、本吉病院へ向かったが、被災した家が覆い被さって道路が遮断されており、病院の1階は水浸していた。外傷等がなかったので病院より避難所の方が良いと判断して、車に乗せて中学校に搬送した。

中学校には、残っていた1、2年生と先生方、近くの人が避難していた。第12分団（山田地区）が軽トラックで心肺停止状態の3人を運んできたので、私が引き継いで保健室に入れて心肺蘇生法を実施した。高校の先生がAEDを持ってきたが、30歳代の母親と1歳と3歳ぐらいの子ども3人とも蘇生できず、“無力感”に包まれた。

私たちは、16時50分、すでに帰宅していた3年生以外の生徒・職員70人、一般の避難者10人と本部に報告した。第13分団の他の団員が、車両に乗っている親子など7人救助した。

避難所となった小学校で救援活動

その後、小学校に行き、安否確認と避難者数を報告した。消防団としては子どもの健康面を考え、自家用発電機もあり空調が整っている近くの公民館への避難を提案したが、保護者は公民館が津波浸水地の近くであるので小学校にいたいと言い、避難していた近くの住民も含め、小学校の校庭に120台強の車両を置き、車の中で待機となった。

18時過ぎに避難者への炊き出しを近くの自治会に依頼した。各自治会には合併前に発電機を用意してあった。断水していたので水は各自持ち寄った。19時20分に小学校に220個のおにぎりを届けてもらい、子ども優先でおにぎりを配給してもらった。車で避難している人の中に高齢者1人、妊婦2人がおり、妊婦はすぐ出られる場所に車を移動した。

小学校への避難で一番困ったのは、燃料がなかったことだ。寒さのため車両もエンジンをかけ暖房をつけていたが、停電でガソリンスタンドは機能していなかった。我々が積んでいた携行缶20ℓくらいも緊急用に備え、本当に必要な分だけ使った。車1台に2人乗車では効率が悪く、燃料がなくなってしまうので、午前2時～3時頃、校長先生と教員から保護者をお願いして、台数をいくらかでも減らしてもらった。翌朝7時～8時に解散した。津波警報はまだ解除されておらず、無線で断片的に入ってきた情報を基に、帰る人たちに各地区の被害状況と通れる道路、近づくかない方が良い場所などを伝えることができた。

遺体の搜索活動と警備

3月13日の副分団長会議で、遺体搬送を分団から出すよう言われた。遺体の搜索・搬送が私たちでいいのかという戸惑いはあったが、総合支所の市民生活課の職員2名と消防団員4名、計6名が待機し、搬送にあたった。

どうしても消防団は地域密着しているため、亡くなった人が「顔見知りで辛い」という話が出た。3月20日頃、緊急援助隊や警察の応援が来たため、団長から警察にやめさせてほしいとお願いした。私の知る限りでは、3月29日に子どもの遺体を遺体安置所へ搬送したのが最後だったと思う。

3月～4月には、日中、防災行政無線がバッテリー切れで使えなかったので、消防団車両を使って各分団1班1台で広報活動に回った。泥棒が



震災当日の消防団無線による応答状況を再現する三浦副分団長

入ったというので、8月13日まで火災と財産保全のため、夜間警戒活動を実施した。当時、避難されない人も多かったが、停電で真っ暗だったので、警鐘を鳴らしての巡回は、地域の方が安心感を持ったという。

活躍したアナログ消防団無線

消防団無線の整備には450万円程度かかり、導入時は高いと思ったが、今回は武器になった。宝の持ち腐れにならないよう、全員がポンプ車と同じように使いこなせるよう、月1回、無線の運用訓練をしており、年月が経つに連れて運用方法はかなりうまくいっていた。各隊は屯所に置き100Vの充電器を用意している。電話が通じず現地に行けない時に、消防団無線で断片的ながらも被災地のことが署や消防団で把握できたのは有効だったと思う。

普段の通常の火災時にも、1台は広域消防にあり、気仙沼消防署本吉分署からの指揮のほか、水利部署や中継送水等に活用している。今回は1台無線機が流されたので、分署隊のものも借りて15台、途中、富士通から1台提供され、16台で運用した。震災当時電話は使えず、携帯電話も通じず、つながるまでに1か月以上を要したが、各分団長には消防無線で連絡が取れた。集合時間、集合場所、搜索範囲、場所が分からない時も無線で伝えた。当初から「バイク隊より無線」という頭



本吉町大沢漁港の被害状況

があり、物は運べないが、情報は運べる無線が有効活用できた。

台数的には無線はあと4、5台は欲しいが、11日は混信がかなりあり、岩手県陸前高田市の消防団無線とかぶった。本吉のほか、旧気仙沼市内、唐桑、大島まで入ると誰が統制するのかという問題が出てくる。消防本部の通信指令課のようなシステムがあればよいと思う。非常備の組織なので、それはできないと思うが、いずれにしても消防無線の装備は大事だ。

本吉総合支所での対応

本吉総合支所1階が、気仙沼市災害対策本部の本吉支部となった。旧本吉の団指揮本部は総合支所に作るようになっており、慣れていた。行政の方も含めて地元の人が多く、意思疎通がかなりうまくいった。気仙沼市内では、比較的、本吉地域が被害の全体像を集約するのは早かった。会議の時に今日の活動報告と明日の予定、どう対応したかなど出した。毎朝7時と17時に課長職以上会議を開き、消防団と常備消防、自衛隊、警察、緊急消防援助隊（山梨県隊）、社協（ボランティア）等にも入ってもらい、情報の共有化が図れた。

しかし、県と防災機関を結ぶ全国瞬時警報システム（Jアラート）があるが、メールやFAXはできなかった。各箇所から電話をすると大変なので、役所としては災害担当の所に要件を集約して



本吉町大沢漁港の被害状況

電話をするようにしていた。本庁の災害対策本部に連絡する時、50回かけて1回つながるかどうかで、つながればその電話で要件を全部話さなければいけない状態であった。

発災直後何日かは、気仙沼市では“タクシー無線”を活用した。防災センターにタクシーを止めて主要拠点にタクシーを配備してもらい、救急隊を要請した。消防団無線でも救急隊要請は結構あった。本吉総合支所に本吉分署員も詰めており、そこまで無線を飛ばして分署への有線専用電話で、救急車を要請した。常備消防と消防団と行政との連携プレーはうまくいった。

鹿折の火災には、3月12日に出動要請は来たが、対応できないと副団長が回答した。翌13日の大島の火災に対する要請でも出動しなかった。小泉地区では、団員40名のうち30名がほぼ壊滅状態の被災をしている。山の方の第12分団からは積極的に応援に出てもらった。海沿いの第11分団、第14分団は、分団、家屋を含めて被災している。第13分団も被災はしたが、出られる団員数も多いので捜索活動等についてはできるだけ多く出ようとした。内陸部からの応援はあれば助かると思う。

最近、階上地区で大規模な火災があった。原因ははっきりしないが、瓦礫の集積地から自然発火したようだった。

被災地域の消防団員の手記（5）（福島県 南相馬市消防団）

家族に心配されながらも
最後まで捜索を諦めなかった福島県南相馬市消防団
小高区団 副団長片岡 芳廣（59歳）
消防団歴 27年（会社役員）

南相馬市の概要と被害状況

南相馬市は福島県の太平洋側に位置し、平成18年1月1日、原町市と相馬郡小高町および鹿島町が合併して誕生した市である。行政区の小高区はその南相馬の南側に位置し、面積は91.95km²、人口1万2,163人（平成23年6月1日現在）で、阿武隈高地を町の西端とし、小高川が町を横切り太平洋へと流れている地域である。また、小高川の中流部には小高城址などがあり、周辺に区役所や駅、2つの実業高校などが集中する。

南相馬市消防団は小高区団（3分団26部）、鹿島区団（4分団28部＋機動部2部）、原町区団（5分団36部＋自動車部2部）、の3区分団に分かれていて、総勢1,334名が所属している。被雇用者（サラリーマン）は1,078名（約80%）と多い（平成23年4月1日現在）。

南相馬市は、東日本大震災により、死者631人、行方不明者7人、負傷者59人の人的被害、全壊5,432棟、半壊1,306棟、一部損壊2,232棟、床上浸水991棟、床下浸水308棟の住家被害に遭った。

振り子のように揺れる家

今もまだ福島第一原子力発電所の事故で苦しむ南相馬市。なかでも小高区全体は今も警戒区域に指定され、全員が避難をしている。私はその小高区の消防団で副団長を務めている。

3月11日発災当時、私は海からすぐ近くの浪江町塩棚で、ある家の住宅設備工事を従業員たちと行っている最中だった。14時46分、大きな揺れが東日本を襲い、福島県にも震度6弱の地震が起こった。一瞬頭をよぎったのは2日前に起こった大きな地震だった。「また地震が来たんだ」と思い、一時作業を中断し揺れがおさまるのを待とうとした。しかし、普段の揺れなら5、6秒、長くても10秒ぐらいでおさまる揺れが一向におさまらず、1分が過ぎたところで立ち合っていた建て主さんと「これは、やばい！」「ここに居られる状況ではない」と判断し、2人で外に出ようとした。しかし、思いのほか揺れは激しく、2人が外に出ようとするのを阻むかのように容赦ない揺れが襲った。建て主さんと四つんばいになりながら、やっとのことで外に出た。外に出てからも瓦の落下に注意しながら激しく揺れる植木につかまり揺れがおさまるのを待った。周りの様子を見まわすと、周りの家の2階が振り子のように揺れ、道には瓦も降ってきていた。長い揺れがおさまると同時に、周りにあった2、3軒の家がまるで振り子のセットのようにバタ…バタッと次々と倒れ始めた。目の前に起こっていることが信じられずいたが、消防団という職務柄、私はすかさず倒れた母屋に向かった。「だれかいなすか？」「いなすか？」と2、3軒の家を走り回り、声をかけ、家

の瓦礫の隙間から安否確認を行った。幸いお年寄りたちもみな大きな揺れにビックリし、外に飛び出していたため、そこでの犠牲者はいなかった。この時、南端の小高区と北端の鹿島区で、震度6弱の揺れが観測されていた。

作業をしていた家に戻ると、建て主さんが「これは津波が来るかも分かんない」と言ったが、この地域ではかつて大きな津波の災害はなかったため、せいぜい大きくても2、3mの津波で防波堤で止まるだろうと、思っていた。しかし建て主の方に再度「これはすぐ津波が来るかも知れないから片岡さんもすぐ退避したほうがいいよ」と言われ、残った仕事を片付け、15時過ぎに従業員と一緒にその場を撤収し、会社に戻ることにした。

迂回に迂回を重ねて会社に戻る

会社は小高区の福岡行政区で、作業をしていた現場からは車で20分くらいの所だった。街道を北上し帰る道すがら、ひび割れた道路状況を見てこれは尋常ではないと思った。ことの重大さに、他の現場の作業員にもすぐ撤収するように電話を入れたが、すでに電話は通じなくなっており、連絡の付けようもなかった。しばらく車を走らせていると配水場の所に警察官が2人立っていて「井田川の配水場に向かう道路が50cm下がっていて通行止めになっているため別のルートを行ってください」と言われた。やむを得ず、コースを変えて帰社することにした。ところが、各道路の舗装状態も地割れなどでかなりの段差ができていて車が思うように通れなく、迂回に迂回を重ね通常20分で行ける距離が相当な時間がかかった。ようやく戻ったのが15時30分過ぎだった。

津波から逃れ高台へ避難

やっとの思いで会社に戻り家の様子を確認していると、1台の消防自動車が「津波だ！　すぐ逃げろ！」と広報をしながら猛スピードで飛ばし目の前を通過して行った。自分でも一瞬「なに？」とその言葉に呆気にとられていたが、目を海のほ



津波で被害にあった事務所

うに向けると津波がすでに国道を越え会社の目の前まで来ていた！「これはいけない」と思い、先に家族を車に乗り込ませ急いで退避させた。そうこうしている間に津波は瓦礫と共に会社の10m手前まで来ていたため、自分も急いで高台に車で避難した。工場のある高台へ避難し、2波3波と来襲する津波がおさまるのを待ち続けた。その状況をなすすべもなく見守った。津波が、南相馬市の海岸線から約2km付近までの町を呑み込んだ。小高区塚原字沼在住の自然環境調査員の見聞証言によれば、特に津波の第3波は大きく、海岸線に設けられた高さ十数mの防潮林を越えたという。

津波がおさまったのを確認した私は、自転車を借り、避難していた高台から自分の会社に行ってみることにしたが、農道の半分まで来ると、海水は膝まで水没しているため自転車を使うことは出来ず、小高い所を探しながら徒歩で会社に戻った。会社はすでに1階のガレージ部分が破損され、従業員の車も流されており、この津波が尋常ではないことに私は茫然とした。会社に戻る道すがら偶然にも小高福岡行政区を管轄している東部地区の第3分団長と行きあい、すぐに区役所に行こうということになったが、行く前にこの状況を把握しようということになった。辺りはすっかり日が落ちていて薄暗くなっていた。

救助、捜索は夜通しで行われた

国道6号は大分水が引けていたため、私は第3分団長とともに国道6号を北上し区役所に向かった。状況確認をしながら車を走らせたが、辺りは予想だにしない瓦礫の山が散乱し、言葉にならない

い状態だった。18時に区役所に到着した。区役所では災害対策本部が立ち上がり、打ち合わせがすでに始まっていた。自分も対策本部に入り、消防団の救助活動についての救助マップなどを作成し、消防団幹部で作戦をたてた。

辺りが暗くなってきたため、一人ひとりで探すのは困難とし、10名1組のグループで行動をすることにした。通信網が多少復旧し、区役所には救助を求める市民からの電話が入るようになった。消防団は救助要請が入った所を優先的に分隊で動き救助に向かった。水位は多少引いていたものの、海水で孤立したところが多く出たため、ゴムボートなどの用具が必要となった。消防団の備品にゴムボートはなかったが、団員が個人で所持しているゴムボートを使用した。暗い水のなかへとボートを曳き、懐中電灯で照らしながら進むため、瓦礫の破片や釘が剥き出しになっており、活動はかなりの危険が予測された。私は安全第一で務めるように団員たちに強く指示した。

搜索は夜通しで行われた。暗闇のなか、車のなかで人の気配はすれどもそこまで行くすべがなく、助けたくても助けられないジレンマがあった。今回の救助では、今までの訓練でありえなかった想定外の予測不能なことばかりが起こった。要救助者はご老人や身体の不自由な方が多く、救助活動は困難を極めた。情報も錯綜していたため、負傷者がどのくらいいるのかなど、把握するのに時間がかかった。こうして、救助活動は夜が明けるまで続いた。時間が経つにつれ、連絡が取れるようになると、召集をかけることが出来るようになり、徐々に消防団員の人数が増えていった。

原発が爆発したらしい

翌朝12日8時。この頃は誰も、福島第一原子力発電所の事故のことは頭になかった。人数も増えてきた小高区の消防団は、この朝も1班から13班に分かれ各チームに分かれて搜索を行った。救助に加え遺体搬送の作業も入り、団員の負担も増え

た。自分も搜索本部の一角で、団長や副団長、警察の方と搜索の作戦を練っていた。そして…その情報は警察無線より突然入ってきた。一緒に打ち合わせしていた警察官が「原発が爆発したらしい」と小声で言った。誰もが一瞬にして止まり「え？ なに?!」と振り向いた。

「原発が爆発した」という情報に、警察官も消防団幹部も「消防団の搜索隊も一時退避したほうがいい」となり、外で搜索している団員や隊員に、すぐさま「一時搜索をやめて車に待避せよ」と無線で連絡をし、30分程度車内に待機させた。その後、なんとそれは「誤報」という修正情報が入って来たのだった。が…それこそが誤報であり、実際には、原子力発電所で水素爆発が起こっていたのだった。あの時、現場はかなりの情報が錯綜し混乱をきたしていた。昨晚からの夜通しの活動ということもあり、消防団の疲労も考慮したうえで、12日は15時くらいに搜索が打ち切られた。

同日の夕方、原子力発電所で原発事故が起こっていることが明らかになり、区役所に緊急対策室が設けられた。緊急対策本部では、原子力発電所の事故を受け、明日からの搜索をどうするかが話し合われた。第一に上がったのは「原発事故を踏まえ、20km圏以内で活動する消防団の放射能対策はどうするか」ということだった。消防団の装備としても防護服が2、3着という少ない数で、マスクだけで対応せざるを得ないのが現状だった。18時25分には原子力発電所から半径20km圏内の住民には避難指示が出され、小高区もその圏内に入っていた。消防団の搜索も困難を極め、住民から「遺体がある」と通報があっても屋内退避や避難指示が出ている地域で、マスクだけでは対応するのは危険を伴うため団長も「いけ」と指示を出せずに悩んでいた。しかし、私たちは各自で判断し有志という形で動くことを決意した。他の団員には強制せず、自ら防護服を身にまとい、搜索を続けた。原子力発電所で働いている団員もいたため、放射線の知識に関するレクチャーも受けた。

搜索の断念と無念…そして再開

小高区では12日に避難指示が発令された。13日には消防団のローラー作戦による「避難指示」の広報活動が行われた。この地域の住民の方々は原子力発電所について非常にナーバスになっており、広報活動、誘導活動は早期にスムーズに行われた。大部分の区民は、市が用意したバスで18日から20日にかけて集団避難をした。有志で搜索に当たっていた消防団も、家族の意見もあり避難せざるを得なくなった。14日午前中に、小高区は事実上地域全域の閉鎖となった。

消防団の事務局は原町区に移したが、搜索は一時休止となってしまった。14日以降、小高区の消防団は避難所で、避難民への食事の準備などに従事した。私の家族も会津へと避難したが、私は南相馬に残り、消防団の活動を継続した。来る日も来る日も避難所で世話をした。消防団も精神的疲労が積み重なってきていた。

そんな中、福島第一原子力発電所で3回目の爆発が起こったと情報が流れてきた。当時を振り返ると、「さすがにもうこれで駄目だ」と思い、あの時は疲労と重なり、本当に心が折れた。その爆発をきっかけに、残っていた団員と話し合い、活動を一時休止しようということになり、有志の消防団員たちも一旦それぞれの避難所に戻った。

4月8日、小高区に朗報がもたらされた。原子力発電所は不安定ながらも落ち着きだしたため、再び救助・搜索活動が再開できるとの話であった。消防団を徐々に招集し始め、最初の頃は私を含め3名だった。防護服を着て積載車で瓦礫のなかを搜索し、小高区の建設業者に頼み、大きな瓦礫などを重機で取り除きながら、遺体搜索にあたった。時間が経ち過ぎてしまった遺体は、色が変わっているため、瓦礫と間違わないように搜索するのに苦労した。まだ海水が深々と残る地域にはなかなか入れず手つかずだったが、排水ポンプ車などを導入し、排水しながらの搜索を行った。

家族に心配されながらも、職務をまっとうすべく、最後まで小高区の搜索を諦めなかった。南相



防護服を着て活動を再開

馬市では消防団の設備もしっかりしていた。救助活動は、これらの設備があつてこそ発揮できる。消防団の活動は危険を伴うと思われがちだが、危険を回避するための装備を揃えたうえで活動できれば、よりよい活動が出来ると思う。

この災害により、小高区の住宅被害は全3,771世帯中、全壊317世帯、大規模半壊33世帯、半壊65世帯、床下浸水48世帯にも及んだ。

多くの人に助けられながら気概を持って

私は今回多くの関係者の方に助けられたことを感じている。この地震、津波を受け、海に面した我々の地域は、津波に対する意識がもっと必要ではないだろうかと思う。一旦避難しても、「大丈夫だ」と言って戻ってしまい、津波にあわれて亡くなった方も少なくない。また、道路の作りも、山の方へ逃げる道が少なく、海岸と並行に走っているため、波から逃げ切れず、車ごと津波に飲まれた方もいた。今回のような未曾有の災害をいつまでも忘れず、心に戒めることが肝要である。

私は自衛隊出身で災害派遣も何度も経験した。人一倍責任を強く感じ気概をもって消防団の職務に従事している。それが自分の誇りである。そして、私は今も南相馬の地で、放射線量計ガイガーカウンターを片手に持ちながら、消防団活動にあたっている。

被災地域の消防団員の手記 (6) (福島県 いわき市消防団)

津波への警戒心薄かった
地域住民福島県いわき市消防団
第2支団第1分団 庶務部長吉田 一弥 (52歳)
消防団歴 11年 (会社経営)

いわき市の概要と被災状況

いわき市は、福島県の南東端、茨城県と境を接する、広大な面積を持つまちで、東は太平洋に面しているため、寒暖の差が比較的少なく、温暖な気候に恵まれた地域である。人口は、33万2,686人（平成24年3月1日現在）と東北地方では仙台市に次ぐ人口を擁している。面積は1,231.35km²で、約60kmに及ぶ海岸線に点在する海水浴場や日本三古泉の一つに数えられる「いわき湯本温泉郷」を中心とした観光サービス業などを展開している。

いわき市消防団は、7支団47分団327班3,744名（平成23年4月1日現在）で構成されている。第2支団は、407名、消防ポンプ自動車5台、小型動力ポンプ積載車35台で構成され、市の北東部の位置する四倉・久ノ浜・大久地区を管轄としている。

いわき市全体では、東日本大震災による人的被害は死者310人、行方不明者37人、負傷者4人、住家被害は全壊7,710棟、半壊3万798棟となった。

3日続きの警報があだに

3月11日の大地震が起きた時、私は仕事の関係で小名浜港近くに出向いていた。これほどの揺れは起震車で体験しただけで、実際に経験したこと



中之作漁港(国土地理院)

のない激しい揺れだった。屋根瓦がバラバラと落ちたり塀が倒れたりする様子が目に入った。この辺りは震度6弱だった。

「すぐに戻らなければ」と、車を走らせていわき市中之作にある第1分団第4班の詰所にたどり着いた。途中、道路が陥没している箇所もあった。地震の被害はかなり大きいと感じた。詰所では仲間の団員が、すでにポンプ車を出動させる準備を整えていた。それを確かめると自宅に戻り、隣近所の十数戸に避難を呼びかけた。

「大きな余震が来るかもしれません。建物の中は危険なので、すぐに外へ。がけ崩れが起きそうな場所には近づかず、瓦が落ちてくる心配のない広い場所に逃げてください。津波が来るかもしれないから海にも近づかないように。」

注意事項を細かく伝え、再び詰所に戻っ



江名郵便局周辺の浸水状況

た。自分も含め、8名の団員が勢ぞろいした。詰所の隣にある区民館にいた人が「テレビが大津波警報の情報を流していた」と知らせてくれた。「急がなくては」と、私は団員のうち2名をポンプ車に同乗させて出動。中之作の港周辺を重点的に一回りして「大津波が来るから、すぐに避難してください」と、知らせて回った。倒れたブロック塀で一部が塞がれた道路もあった。詰所に待機させた5名の分団員も、それぞれに住民たちが円滑に避難できるように誘導していた。自分たちも詰所周辺に引き返して「海に近づかないように、高い所に逃げてください」と呼びかけながら、走行中の車の誘導に当たったが、受け手側に緊迫感が伝わらないことにいささか苛立ちを感じた。

中之作地区は海岸沿いの湾岸道路が緩やかな登り坂になっている市道につながり、その両側に住宅地が広がっている。その市道をみんな、ゆっくり歩いていた。自分たちの呼び掛けが決して大げさではないことを分かってもらいたくて、「命が惜しかったら、急いで走れ」と、大きな声で叫んだ。ただ、9日、10日にも地震があり、津波警報も出ていたが、海面にこれといった変化は観察されなかった。その時もポンプ車で津波の広報に回っており、住民たちの間には「またか」という思いがあったに違いない。

日没まで続けた津波監視

3月9日、10日の地震発生後に、私たちは警報を伝えて回った後、海の様子を注意深く見守ったが変化が見られず、2時間ほどで警戒態勢を自発的に解いた。警報解除の通知はどこからも伝わってこなかった。だから、解除の広報はしていなかった。そのことが住民たちの緊迫感を削ぐ一因になったのではないかと後になって反省した。

車道には、たまたまこの地区を通りかかった車も混じっている。そうした他地域の人たちをも混乱のないように誘導してやらなければならない。

住宅地を縫って走る5本の登り坂道路ごとに団員を配置。混乱なく、避難者を誘導した。それぞれの道路には緊急の避難場所になるような空き地があり、そこにはそれぞれ20人～30人ずつが集まり、海の様子を見てカメラやビデオで撮影している人もいた。緊急避難した人の2割ほどは地元以外の人たちだった。

消防団員たちは手分けして避難場所に集まった人たちの保護に当たった。私は詰所の近くで津波の到達を監視した。第1波は港の岸壁に乗り上げたが、ひたひたと洗う程度だった。第2波は港湾道路を完全に乗り越えて6m～7m奥の市道のすぐ脇まで達していた。港湾道路と市道の高低差は約2m。その後に発生した第3波が最大で市道をも乗り越えた。さらに第4波、第5波が押し寄せたが、港湾道路が水浸しになるくらいで収まった。



浸水した沿岸部

津波があと50cm高かったら、詰所も床下浸水の被害を受けるところだった。

市道をさらに上って行くと県道につながる。津波の心配はほぼなくなったと判断して、市道周辺に一時避難した人たちに海には決して近づかず県道方向へ抜けるように促して避難場所からの移動を指示した。その後も万一に備えて、数人の消防団員が交代で暗くなるまで海の監視を続けた。

第1分団第4班の管内では、港湾道路と市道の間に建っていた50戸ほどが床上・床下の浸水被害に遭ったが、流失した建物はなかった。小名浜港界隈の地区のうち中之作は複数の防波堤のおかげで跳ね返った波同士がぶつかり合い、津波の直接の勢いを削いでくれた。しかし、隣接する永崎、折戸辺りの地域は津波に直撃されて大きな被害が出た。流失、損壊も含めて家屋の被害は7割に及んだ。残った3割も全くの無傷は少なく、床上・床下浸水の被害を受けている。

臨時の避難所にした区民館の瓦もかなり落ちていたので、消防団員たちが地区の役員とともにブルーシートを被せた。区民館近くの中山医院がデイサービスで預かっていた介護が必要な高齢者10人も看護師が付き添って区民館に避難してきた。区民館の避難者は全部で50人ほどになった。管轄区域内では、江名中学校と真福寺別院も避難所として指定されている。江名中学校の体育館には、怪我人もいて、中山医院が治療にあたってくれた。治療には照明も必要だろうと判断して、区民館に保管してあった発電機を体育館に運び込んだ。発電機は、照明とともに暖房用にも利用してもらった。真福寺別院にも20人ほどが避難していたので、暖房機を届けた。

原発事故の影に泣く漁港

消防団員は、交代で一時帰宅しながらも、明け方まで全員が緊急事態に備えて待機の態勢をとり続けた。3月12日になって、新たな恐怖が生じた。東京電力㈱福島第一原子力発電所の事故である。

どう対応するかを消防本部と相談した。安全が確認できるまでは、とりあえず福島第一原発から少しでも遠くへ離れることが最善策だということになった。事情が許す限り、いわき市よりも南か西の方角のできるだけ遠くへ退避するように呼びかけた。とくに放射線の影響を受けやすい子どものいる家族は避難するように説得した。それに応じて8割ほどの住民が一時的に地元を離れた。

見えない不安に脅えながらも次の日には帰宅した人、1週間後、1か月後に帰宅した人といった具合で退避後の行動はそれぞれだったが、7月末までに全家族が自宅に戻っている。しかし、消防団が発した自主的退避勧告は間違っていなかったと確信している。

地元の中の作港はカツオ漁港として知られている。だが、大きな被害を受けなかったのに、原発事故の風評被害でほとんど水揚げのない状態が続いている。実際には小笠原とか房総沖で漁獲したものなのに、中之作港のカツオということで買い手がつかない。隣接する小名浜港でも同じ状況が続いている。理不尽な話である。中之作はウニの貝焼きも名物だが、これも利用者から敬遠されて、漁協関係者も平成23年中の営業再開を断念した。

津波で港内に沈んだ車両や瓦礫もすっかり撤去され、港としての機能は完全に回復しているのに、中之作港は開店休業状態になっている。

電気は早い段階で復旧し、各家庭の冷蔵庫にあった食品は無駄にせず利用できた。米の買い置きもある。干物や保存食もある。区域内には震災で破損した冷凍倉庫があり、中に貯蔵してあるかまぼこなどの食糧を利用してほしいと所有者から申し出があり、当面は食べ物に困ることはなかった。

生活用水探しに走り回る

しかし、生活水の確保では苦労した。この地域では大震災発生で断水後、どこからも全く給水の



給水活動

ない事態が1週間も続いた。自宅は難を逃れたものの、実際には生活ができない状態だった。消防団員たちは地区の役員にも協力してもらい、井戸水や水道水が出ているところを周辺地域にまで範囲を広げて探し歩いた。各戸当たり1日5ℓほどの水をなんとか分けてもらい、断水した家庭に配って回った。

その後、地元の浄水場で直接に取水できるという情報が入り、分団員たちが2t車に大きなポリタンクを積んで水くみに日参した。こうした事情を知った第2支団本部及び他の分団からも給水の応援が入り、生活水確保の闘いはひと息つけた。市役所から給水してもらえるようになったのは、大地震発生から2、3週間ほど経ってからだった。

自衛隊の救援活動による給水は、あくまで避難所が対象である。自宅でなんとか生活できるような場合は、住民が自力で水を確保しなければならず、消防団が支援せざるをえなかった。それでも住民たちの水不足状態が解消されるまでには、しばらくの日時がかかった。そのうちに避難所が最優先だった自衛隊の給水活動にもゆとりが出てきて、スーパー前でも受け取れるようになり、水に対する不安が薄らいでいった。

この地域で断水した水道が復旧したのは4月10日、ちょうど1か月かかった。それも半分の地域だけ。翌日には全域で復旧するかなと期待してい



被災した消防車

たら、4月11日に震度5の地震が発生。再び、断水になった。完全復旧は、それから1週間後となった。

地元住民を守るために

東日本大震災に絡んで、水の確保や原発事故後の対応など消防団活動のマニュアルには明記されていない状況にいくつも遭遇した。その都度、地元住民の生命・財産を守るという大前提に合わせて自主判断し行動した。

消防団として所有していた10台の消防車のうち4台は津波の被害で使えなくなり、その分だけ地元住民に対する支援活動や広報活動などが制限されたことは否めない。

自分が経営している非破壊検査会社も、受注の3割を占めていた原発所在区域からの仕事はゼロとなった。いわき市内の仕事もほとんどなくなり、今は従来の3割しか仕事量がなく、7割の従業員には辞めてもらっている。

いわき市消防団第2支団第1分団は、吉田伸分団長含めて総勢は16人。そのうち、自営業は4人、あとは会社勤めという、いわゆる都市型の消防団組織である。今回は、サラリーマン団員も大地震発生から1週間は勤務先の会社が臨時休業状態だったので、一番忙しい時期はほぼ全員が消防団活動に携わることができた。